第２　教育研究団体の意見・評価

①　日本地理教育学会

（代表者　池　俊介　　会員数　約500人）
ＴＥＬ　042-329-7729

地　　理　　Ａ

１　前　　文

大学入試センターから，問題作成方針が出されている。この中で，知識の理解の質を問う問題，思考力・判断力・表現力等を用いて解く問題，生徒の学習過程を意識した問題の場面設定を重視すると示されている。地理については，地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視し，地理的な見方や考え方を働かせて，地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求めている。思考過程を重視しながら，地域を様々なスケールから捉える問題，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題を出題すると示されているが，これらの点について，次項で設問ごとに述べる。なお，本年度の問題総数は31問で，昨年度と同様，５大問構成，問題の分量は例年並みで，基礎的な問題が多い。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　地理的技能の活用と日本の自然環境・自然災害に関する大問である。図法の読み取りや，地理院地図を活用した設問など，基本的な事項を問うものが多かった。いずれの問題も，基本的な知識・技能を問う設問であり，難易度は標準的といえる。

問１　メルカトル図法の特徴を理解した上で，正誤判定する問題。それぞれ典型的な内容の選択肢であり，判別は容易である。

問２　写真と地形図とを対比させ，撮影地点を特定させる問題。地形の特徴から判定はそれほど難しくはないものの，長年，指摘があるように，写真が不明瞭で判読しづらい。

問３　日本の気象に関する各種データと分布図をあてはめる問題。地域ごとの特徴がよく表されており，標準的な設問で，解答は容易である。

問４　海に面する地域の特徴を読み取らせる問題。２枚の図を対比させながら，選択肢の内容を丁寧に読み取れば解答でき，難易度は平易といえる。

問５　河川が流れる低地の地域での避難経路上の特徴を判読させる問題。地理院地図の陰影起伏図をもとに作成されているが，等高線と高低差のある場所の表示が一部同じに見える箇所があり，もう少し，判読しやすい表現方法への工夫が欲しかった。

問６　自然現象がもたらす自然災害と資源についての正誤判定問題。竜巻の特徴を理解できていれば，解答は容易であり，難易度は平易といえる。

第２問　世界の生活・文化に関する大問である。すべての小問にグラフ，写真，主題図，統計といった資料が設定されており，それらを読み解き，選択肢の文章と関わらせながら，もしくは他の資料と比較対照しながら正答を導き出していく共通テストに相応しいものであった。全体的に基礎的な知識をベースに思考力・判断力が求められる問題形式となっており，良問と判断できる。

問１　北アメリカ，東アジア，ヨーロッパ，アフリカにおける用途別の年間水使用量を示したグラフを読み解く問題である。農業，工業を中心とした各地域の産業構造や人口規模を理解していれば，解答は容易である。

問２　ある地域における作物・家屋をとらえた写真と，４つの地域の月平均気温（最暖月，最寒月）・降水量（最多雨月，最少雨月）を示したグラフを比較・考察しながら，該当地域の気候の特徴について判断する問題である。写真から熱帯地域であることは理解できるゆえに，それを手がかりにグラフから４地域の気候の特徴を読み解くことができれば，該当地域の判断は容易である。

問３　イギリスでみられる水路橋を通る船舶，ボリビアでみられるロープウェイ，各々の写真の考察から，両者が移動手段として導入された背景について選択肢の文章をもとに判断する問題である。２枚の写真ともに起伏のある地形が背景にあること，ボリビアの写真については，谷筋にビル群や家屋の密集がみられ，都市部であることが理解できる。これらを手がかりにすれば，自ずと解答は導き出せる。

問４　マレーシア，メキシコ，カタールいずれかの空港における出発案内の写真と東京から各国への週当たり往復旅客便数を示すフロー図を手がかりに，写真の該当国について判断する問題である。各写真に記載の言語や東京から各国への旅客機の便数を基にすると該当国の判別は容易である。

問５　サケ・マスの輸出量と輸入量各々上位10か国を示す２つの主題図と，その中に表記されている各国の鮮魚・冷蔵品，冷凍品の内訳から正しいものを判断する問題である。日本と中国は経済発展に伴う食の多様化や外食産業の発達により，世界有数のサケ・マス輸入国である。ゆえに，本来「秋・冬の味覚」であるサケ・マスは季節を問わず安定確保が必至となる。冷凍品の輸入が主流を占めるようになるのは必然的といえる。そのような予備知識をもっていれば，解答は導き出せる。

問６　３つの国における製造業出荷額に占める業種の割合と，各国の製造業の特徴について述べた文章を照らし合わせ，合致するものを組合せていく問題である。繊維・衣類，石油製品，輸送用機械それぞれの製造業の成立条件についての予備知識があれば，解答は容易である。

第３問　北アメリカを事例とした大問である。小問ごとでみると，自然環境，産業，生活・文化から，総合的に北アメリカを捉える構成となっており，地誌的な大問と捉えても差し支えはない。問いから考えられる仮説を判断する問題，課題解決型として扱った問題のような，いわゆる探究的要素はみられないが，教科書に記載された基本的な知識をもとに，資料を読み取って判断する問題が多い。難易度は比較的易しく，受験者のこれまでの頑張りが報われる問題構成になっているといえよう。

問１　自然環境に関する景観写真から位置を判断する問題である。「ア」をフィヨルドと読み取れるかどうかがポイントとなる。フィヨルドが「氷食によって形成されたU字谷が沈水してできた海岸地形」という定義を理解した上で，さらに景観を判断させるといった思考の過程は評価でき，良問といえる。

問２　農産物の統計を主題図で読み取る問題である。メープルシロップの統計はあまり馴染みがないが，アメリカ合衆国における農牧業の地域区分に関する知識から解答できる。ブドウに該当するものを選択するようになっているが，トウモロコシや綿花に該当するものも含め，判断しやすい。総合的に捉えさせるのであれば，あえてメープルシロップに該当するものを選択させる問題にしてもよかったであろう。

問３　アメリカ合衆国の４地域における人口構成に関する読み取り問題である。アジア系は太

平洋岸の西部で割合が高く，アフリカ系は南部で割合が高いことが分かれば正答として導くことができ，平易な問題である。

問４　都市景観の写真から生活・文化の様子を問うた，「地理Ａ」らしさを感じる問題である。「シ」の写真がキリスト教の教会であることが分かれば，ヒンドゥー教について説明している②が誤文だと判断できる。問１と同様に，「文字情報としての知識の習得のみでは不十分である」というメッセージが伝わる問題である。あえて一つ注文をつけるならば，③は「ハラール」の用語だけが一人歩きしており，イスラームに関する用語であると何となく覚えていれば，用語の意味を理解していなくても③が正文だと判断できる。用語の本質をきちんと踏まえた上で，資料に対して考察できる問題をお願いしたい。

問５　デトロイトとサンノゼにおける職業別就業割合の違いを判断した上で，都市問題を判断する問題。表１の読み取りと文章中の空欄Ｅは，シリコンヴァレーで先端技術産業が成長して地価が高騰したこと，デトロイトの自動車産業が斜陽化したことが理解できていれば解答が可能である。受験者にとって，文章の空欄Ｆに当てはまる語句で迷うが，表１で地域の特徴を比較して読み取った上で，都市でみられる諸問題を捉えさせる思考の過程は，地理教育の理念にも合致していると考えられ，良問といえる。

問６　カナダの多文化主義に関する問題である。問題文の１行目，図に関する事柄の説明文の文脈を手がかりに，閣僚構成もダイバーシティが進んでいることを読み取ればよい。平易な問題であるが，多文化主義の本質を問うている点で評価できる。

第４問　国内外の環境問題に関する大問。授業の探究場面が設定されている。初見の図表もあるが，基本的な知識をもとにして地理的な技能や思考力が求められる問題となっている。

問１　地球温暖化に対する主な国や地域の立場を問う問題である。環境問題で取り上げられる国や地域としてＡ～Ｄは適切である。しかし，会話文の内容①～③については，わかりにくい表現が多く，④以外は判断に時間がかかった受験者が多かったのではないだろうか。

問２　日本を中心にした４カ国のプラスチックごみの輸出量を問う問題。資料１の下部にある説明文を参考にしながら解答することができる。このところ注目されているプラスチックごみの処理問題に焦点を当てて基本的な表の読み取りを行うという共通テストらしい良問である。

問３　国際河川であるライン川で発生した有害物質の流出事故について，４つの観測地点の濃度を読み取る問題。４つの説明文のうち，Ｋは移動速度をどのように求めるか時間を要した生徒が多かったのではないだろうか。他の３つの選択肢は，グラフより判読できる。４つの観測地点の有害物質の推移を示したグラフは初見であるが，地図・説明文と関連させて考察すれば読み取ることができる。共通テストらしい良問と言える。

問４　バイオ燃料を導入している世界の代表的な国に関する問題。サトウキビを主原料とするブラジル，トウモロコシ由来のバイオ燃料の需要が増加したアメリカ合衆国，アブラヤシを主原料としているインドネシアをキーワードにして選択することができる。基礎的な問題である。

問５　日本の三大都市圏にあるいくつかの都市の自家用車利用の割合と人口密度に関する問題。図２の中心都市と周辺都市のＸとＹの判別は，注釈を手掛かりにして考察することができる。図３の通勤ルートの違いによる環境負荷を計算させる問題は，初見であるが計算は容易である。答えは，図２と図３の組合わせを考えなければならず，共通テストらしい良問と言える。

問６　４つの環境の取組みの例に関する問題。①･③･④は基本的な知識で正しいと判断できる。

②は「有害物質の流出事故による国際河川の汚染の拡大」とその取組みとして「きれいな飲用水を供給できるよう浄水施設を整備する」ことの整合性を考えれば，誤りを含むと判断できる。基礎的な問題である。

第５問　利根川下流域を対象とした地域調査に関する大問である。地図や様々な資料をもとに，地理的技能や思考力を働かせて解答する問題が多く見られた。また，解決策やさまざまな取組みの意味や効果に関する問題や探究課題に対する調査方法に関する問題も出題された。問題を通して，普段の学習から地域の課題に対して地理的な見方・考え方を働かせてその要因を考察し，解決策を見いだしていく学習が必要であると感じられた。いずれの問題も難易度は比較的易しい。

問１　前半は，図１の河川を示した図を読み取り，利根川の本流に流入する河川を選ぶ問題である。後半は，地図上の２地点間の距離と勾配をもとに標高差を計算して求める問題であり，どちらも地図を読む際の地理的技能を問うた基礎的な問題である。勾配を計算させる問題は久々の出題となった。

問２　図２から自然要件と社会条件を読み取り，それらをもとに各地域の土地利用割合について考察する問題である。問題の難易度自体は高くないが，自然地理・人文地理両方の見方・考え方を働かせて考察させる問題であり，良問であるといえる。

問３　会話文中のヒントを手掛かりに考察する問題である。前半は，会話文中の「江戸時代の水運によって発達した」の文章から，図４中の小野川が流れているｂ地域が水運によって発達したと推察できる。後半は，「1932年に橋が架かっていた地点は，川幅が比較的狭い所」の文章の内容を，図５に当てはめて考察する。どちらも，図から読み取れる事象の背景を考えさせる問題となっている。しかし，前半では水運によって発達したことが問題を通して受験者にうまく伝わっていないのではないかと懸念される。

問４　前半は，利根川の支流への逆流を防ぐための水門の位置を考察する問題である。地図を用いてどの地点であれば逆流をより防ぐことができるのかについての思考力を問えている。後半は，下流域における洪水への備えに関する取組みを考察する問題である。どのような解決策がどこで有効かについて，普段の学習においても考えておく必要があるというメッセージに感じられた。

問５　前半は，日本国内におけるウナギの供給量について，表をもとに国内の養殖量もしくは，国外からの輸入量のどちらかについて，表中の数字の増減幅に着目し考察する問題である。表から変化を読み取る技能とそこから分かることを，それぞれの指標につなげる思考力が問われている。後半は，河川における水産資源回復に寄与する取組みについての知識が問われている。

問６　探究課題に対する調査方法についての技能が問われた問題である。普段から課題を設定し，自ら様々な手段を用いて探究することが重要であるというメッセージが受け取れる。一つの課題に対して一つの調査で問われているが，一つの課題に対して複数の調査方法から適切なものを吟味させるとより高い技能を問えるのではないかと考える。

３　総評・まとめ

知識を問う問題を解くためには，教科書内容の理解とその活用能力，関連知識をもつことが求められる。本年度の問題を見ると，問題文や資料・注記をよく読み，教科書内容と結び付けることができれば，ほとんどは解答できる問題である。近年の思考力・判断力・表現力等の重視と相まって，知識や資料（地図17点，図10点，写真８点，表３点，図表のない問題は２題）の活用能力を判定す

る問題が多い。問題作成方針にある日常生活や社会問題と関連付けた問題としては，避難経路，地形分類と水害，ダイバーシティ，プラスチックごみ，生徒の学習過程を意識した場面設定としては第４問と第５問があげられる。中でも第４問と第５問の各問６は，地球的な諸課題の解決に向けて構想することができるか，探究課題の調査方法を理解しているかを判定しようとしている。また複数の資料や文と関連付けて，地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程が身に付いているかを判定する問題として，第２問の問２と問４，第５問の問２があげられる。本年度の問題は全体的に見ると，問題作成方針に沿った基礎的な問題が多く，分野や問い方もよく考えられ，バランスのとれたものであった。

４　今後の共通テストへの要望

共通テストで気になった点を以下に３点指摘しておく。第１は，図表を用いた出題が多いため，写真（濃淡・コントラストの工夫）や地図においては，配慮の必要な受験者も考慮して，分かりやすさと誤解を生じないように一層検討していただきたい。第２は，第３問の問４や第５問の問６の指摘にあるように，受験者の思考力・判断力や深い学びを判定する点からも，他の問い方も検討していただきたい。このことにより問題が難化する可能性もある。また，第３問の問４については，問題文に「写真の地区でみられる人々の生活の様子を述べた文」とあり，写真の建物から宗教を想起させ，その宗教を信仰する人々の慣習や文化などについて述べた文の正誤を問う問題であると考えるが，写真の建物から宗教を想起させるよう，問題文の表現を限定しないと，キリスト教教会近くにインド人の店があるとなれば，問題として成立しなくなる恐れがある。第３は，過去の評価と分析で述べられているように，図表と文章読解の作問バランスである。図表読解に偏りすぎた出題では，受験者の情報処理能力を判定するのかと批判されるであろう。

地　理　B

1　前　　文

昨年度と同様，問題数は31問，解答時間は60分間である。地理の場合，地図や写真，統計など様々な種類の資料を駆使しながらそれらを読み取り，解釈した結果を，複数の選択肢と照らし合わせた上で解答へと至る探究プロセスを意識した問題形式になっている。ゆえに，問題の程度にもよるが，１問当たりの解答時間はおおよそ２分間を目安にしている。全体の問題量が解答時間に見合ったものなのかどうかは議論の余地のあるところだが，このような探究プロセスを意識した問題形式の採用は，物事を迅速に把握し，かつ的確に理解し，課題解決に対応するための情報処理的なスキルが地理教育においても求められていることの表れととらえることができる。地図やGISが空間情報把握のためのツールとして重視されていることからもそのことが理解できる。このことに関連して，知識を単刀直入に問うような一問一答的な形式の問題はほとんど見られず，複数の地理的諸事象を組み合わせながら解答していく形式の問題が17問と全体の過半数を占めている。このような問題は，設問内容に関わる複数の知識を手掛かりにしながら地理的概念や地理的課題を発見していく形式ゆえに，思考力・判断力を要するものであり，本年４月より授業実践がスタートする新科目「地理探究」の目標の一つである「地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，位置や分布，場所，人間と自然環境との相互依存関係，空間的相互依存作用，地域などに着目して，系統地理的，地誌的に，概念などを活用して多面的・多角的に考察」することにも合致している。もちろん，組合せ問題のみならず，単独の地理的事象について問う問題であっても，主題図やグラフ，写真などを用いて諸事象を組み合わせたり，文章を読み取ることで真偽を判断したりするなど，読解力を軸とした言語能力の程度を診断する問題が設定されており，新学習指導要領を意識して共通テストそのものがコンテンツとともにコンピテンシーをも重視していることが理解できる。

2　試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第１問　世界の自然環境と自然災害に関する大問。初めて表現される図表も多く，単なる知識問題に留まることなく，地理的な技能や思考力が求められる問題となっている。

問１　地球上で生じている自然現象を，時間的・空間的スケールから判読させる問題であり，新傾向と言える。ただ，時間スケールの捉え方として適切な問題と言えるのか，疑問が残る。エルニーニョ・ラニーニャは，ほぼ毎年いずれかが発生している。その発生している期間としては数百年・数千年におよぶ。また，地球温暖化もいつからと捉えるのか。産業革命以降なのか，江戸時代の小氷期以降なのか，それとも最終氷期以降なのか。定義を詰めずにこのような図として表すことは不親切である。また，空間スケールの捉え方も疑問が残る。低気圧・台風が最も小スケールであることは確かであるが，他は因果関係もあり，明確に差異を説明できるものだろうか。そういった意味では，縦軸の空間スケールの違いは答えを導き出す手掛かりにはなっていない。知識のある生徒ほど深く考え込んでしまい，誤った選択をする恐れがある問題である。

問２　サンゴ礁・マングローブの分布を問う問題。赤道の位置，大陸の西側・東側，暖流・寒流の向きといった地理の基本的な知識を重ね合わせることができれば，答えを導き出すことは容易である。過去にも類似する問題があったが，一問一答ではなく，２枚の図による答えの組み合わせという点では，共通テストらしい問題と言える。

問３　月別・時間別の気温分布の等値線図から，幾つかの都市を読み取る問題。月別の気温分

布が表現される図は一般的であるが，時間別の気温分布を表した図は珍しく，新傾向と言える。パース，ヤクーツク，ラパスはいずれも各気候区で代表的な都市である。初見の図とはなるが，指標として描かれている東京と比較し，また日較差・年較差を考慮することで判読できる。良問と言える。

問４　大西洋周辺の火山災害と熱帯低気圧による災害の分布に関する問題。変動帯に位置しているのか，熱帯低気圧が襲来する地域であるのか，という基本的な知識で選択することができる，基礎的な問題である。

問５　日本周辺の地震の震源位置と深度の分布に関する問題。震源の位置とその深度が示されており，これも共通テストでは初見の図となる。プレートの境界型地震では沈み込み帯に沿った深い震源域と，内陸（直下）型地震では浅い震源域の，両方の震源を考えなければならず，時間を要する。答えも１つを選択するのではなく，３つ全ての組み合わせを考えなければならず，共通テストらしい良問と言える。

問６　短時間に内水氾濫が生じる都市型水害の背景を扱った問題。降水量と河川の水位の変化を時間軸から丁寧に読み取る必要がある。都市化によって土地利用にどのような変化がもたらされるのかを推測する力が求められた。昨年４月より授業実践がスタートした新科目「地理総合」で求められる「防災」を意識した良問と言える。

第２問　資源と産業に関する大問。各分野のトピックを幅広く扱っており，図表や統計資料を効果的に使いながら問題を構成している。受験者にとって，やや難しく感じた設問も一部あったものの，全体としては標準的な難易度に設定されていた。

問１　中世ヨーロッパの村落の模式図からその特徴を読み取る問題。模式図から土地利用の様子を丁寧に読み取ることで，正解に導ける。難易度は標準的である。

問２　世界の各地域での灌漑面積の割合と穀物収量の特徴から判読する問題。選択肢にある地域の気候環境や農業形態を理解していれば，正解できたのではないか。難易度は標準的といえる。

問３　遺伝子組み換え作物の栽培状況などから正文を判定する問題。図がわかりやすく表現されており，図と下線部の文章を丁寧に照らし合わせていけば，解答は導ける。

問４　国・地域別の畜産物の輸出割合から食肉の組合せを判定する問題。従来から頻出の項目であり，受験者にとっては平易に感じたのではないか。

問５　輸送手段の種類や割合から国名・輸出入を判定する問題。昨年同様の問題形式ではあるが，フランスとポルトガルに関する地理的位置や特徴を把握した上で答える必要があり，正解の判定にやや迷った受験者も多かったのではないか。難易度はやや難。

問６　パルプと古紙の消費量のグラフから国名を判定する問題。消費量は人口と比例することから，国名の判定はそれほど難しくないが，パルプと古紙の判定で悩んだ受験者は一定数いたと思われる。難易度はやや難。

第３問　人口や都市に関する大問。地図や図表の読み取りを通じて，地理的技能や思考力を問う問題となっている。センター試験時代からも日本地理に関する問題が数問含まれていたが，共通テストになってからその割合が増えつつある。大問のリード文にて，「祖父のカヲルさんが住む鹿児島県に訪れたことをきっかけに」とあるが，鹿児島県に関わる問いが少なく，もう少しテーマに沿った問いがあっても良かったのではと思われる。大問全体としてのレベルは標準的である。

問１　国内の人口移動に関する問題。東京圏への一極集中化，四国地方と大阪圏の物理的距離の近さを判断すれば解答できる平易な問題。中学地理でも扱う内容であるため，大学受験の

問題であることを踏まえると，出題方法にもう一工夫欲しい。やや易しめの問題。

問２　東京の変化について，グラフから工業地区の面積，住宅地の平均地価，４階以上の建築物数を類推する問い。1980年代後半のバブル経済，再開発・ジェントリフィケーションや都心回帰現象，産業の空洞化などの背景があることを考えさせる上でのグラフの読み取りで，地理的思考力を問う良問。標準的なレベルの問題。

問３　鹿児島県の薩摩川内市における，都市内部の様子に関する問題。地図に示された情報（市役所・駅・道路）と会話から，各地点の特徴を判断させており，地理的技能を問う良問。やや易しめの問題。

問４　過疎化や高齢化などの人口問題に関する問題。文章の正誤について図の読み取りを含めて考える問題だが，②～④は知識のみで解ける問題であるため，もう少し出題方法に工夫が欲しい。標準的なレベルの問題。

問５　従属人口指数の推移から国々を類推する問題。注で従属人口指数の意味について把握するとともに，各国の人口構成や政策（1970年代の一人っ子政策など）を踏まえて多角的に考える必要があり，地理的思考力を問う良問。各国を判定するのに時間を要した受験者も多かったのではないか。やや難しめの問題。

問６　イギリスの移民出身国に関する問題。三か国との地理的・歴史的関係や，挙げられている年代やポーランドのEU加盟年など，多角的な観点から考えさせる良問。標準的なレベルの問題。

第４問　インドと中国の比較地誌に関する大問。すべての小問に主題図，統計，グラフ，写真のいずれかが資料としてあげられている。中国とインドに関する基礎的な知識と資料を正しく読み取る力が必要である。その上で回答には思考力や判断力が求められる点で，共通テストに相応しいものであった。インドと中国は，日常のニュース等でも，情報を得る機会が多い。２国の変化を理解し，資料の読み取りさえできれば，難易度は比較的易しいといえる。

問１　東アジア，東南アジア，南アジアの自然環境と土地利用に関する問題である。解答するＣの中国華南地方が，山がちな地形であるという知識があれば，容易に森林の割合が高いものを選べることが出来，容易に判断がつく。また地形（標高）は，地図で示されていることから，チベット高原やデカン高原の特徴を理解していれば，解答は可能である。

問２　小麦と米の降水量など栽培条件の違いと地図中の各地域の気候を理解できていれば，判断は容易である。図中で小麦の栽培がさかんな地域は，主に冷涼な中国北部や降水量が少ないパンジャブ地方である。一方で稲作がさかんな地域は，比較的温暖で降水量が多い中国南部やインド東部である。このことは，基礎的な知識であるといえる。インド・中国だけを扱った類似問題は多数あり，難易度は易しい。ただし図の読み取りに時間を要する受験者が多かったと推測できる。

問３　インド政府による家族計画は失敗に終わったという知識があれば，解答は容易である。労働力の必要な農村部では，依然として高い出生率が続いており，2023年には，インドが中国の人口を上回ると予想されている。グラフの読み取りを行わなくても，解答が出来る問いである。

問４　ほぼ同時期に急速な経済成長を遂げている二国の産業別GDPの割合を比較する問題である。両国の産業の特徴を理解していれば，解答は容易である。両国ともに，経済発展が著しく，産業の高度化が進んでいるために，農林水産業の割合が低下し，工業化が進んでいる。またインドではICT産業の成長が著しいのが特徴である。工学系で優れた人材も豊富で，通信系の産業が発達をしているという点での知識を持っているかがポイントである。

問５　移民の動きと貿易の両面の知識が必要なため，この大問の中では，やや難易度が高いと思われる問いである。労働力である移民の動きが，先進国に向かうことと，資源は工業国に向かい，さらにその後，製品が輸出されるということの２つの知識を理解していることが必要となる。前問ともつながるが，インドと中国の工業の特徴の違いも解答の参考になる。

問６　アジアにおけるPM2.5の季節ごとの違いを知るためには，偏西風の季節による強度の差や季節風の風向を理解しているかが重要である。Ｓの時期の中国沿岸部の濃度は高く，冬季の強い偏西風により運ばれていることがわかり，１月であることが容易に判断できる。またＴの図のインドシナ半島周辺は，濃度が低いことから，海から風が吹いていることを推測することは容易であり，７月であることが判断できる。またミの空欄に入る用語としては，複数の国にまたがる事例は海洋ごみの漂着が適当であることも，容易に判断できる。いずれの空欄も基本的な知識から容易に判断ができる。

第５問　（「地理Ａ」と共通のため省略。）

３　総評・まとめ

全体的な難易度については，「地理Ｂ」の学習内容を逸脱することなく，基本的知識を組み合わせながら地理的概念や地理的課題を見出し，それを手掛かりに諸資料を分析・考察し，選択肢と照合させながら正誤を判断させる点において，共通テストに相応しい標準的な問題であると考える。特徴的な表現方法を採り，一見難解そうに見える資料が複数出てくるものの，設問内容は基礎的事項ばかりであるので，表現方法に惑わされないよう，普段から図表を読み取る習慣をつけておく必要がある。なお，このことに関連して，多くの設問に見られたように，地図や統計，写真をはじめとするさまざまな資料から地理情報を読み取るためのスキルが重視されている。ゆえに，高校現場においては，探究プロセスを重視した授業を今後より一層心掛けていく必要がある。すなわち，「知識・技能」をベースに「思考・判断」の過程を踏まえた地理的な見方・考え方の育成を重視した授業開発が望まれてこよう。

４　今後の共通テストへの要望

今回の本試験も，前回のそれと同様に，教科書を中心に基礎的事項を学習し，地図帳で世界の概観をおさえ，資料集や統計データ等を用いてさまざまな種類の図表を読み取るためのトレーニングを地道に積み重ねた者にとっては，十分に解答が可能な標準的なレベルの問題であったと考える。これに加えて，「知識・技能」をベースにしながら「思考・判断」の探究プロセスを重視した問題形式であったことから，２年後に実施予定の新課程入試における「地理総合」は無論のこと，「地理探究」の試験へ向けての布石となるものであったと解釈できる。いずれにせよ，日頃の授業を大切にするとともに，「主体的・対話的で深い学び」の成果として身につけた地理的な見方・考え方を，日常生活のさまざまな場面に生かすなど，地道にかつ丹念に学習に取り組んだ受験者の成果が発揮されるような「良問」の出題を今後とも期待したい。

②　全国地理教育研究会

（代表者　高橋　基之　　会員数　約300人）
ＴＥＬ　03-5802-0201

地理Ａ・地理Ｂ

１　前　　文

平均点は，「地理Ａ」で55.19点（前年度との比較で＋3.57），「地理Ｂ」で60.46点（同＋1.47）となり，地理Ａでは小問１問程度の易化，地理Ｂでは同じ程度の難易度となった。全体として，これまでのセンター試験や共通テスト同様，高等学校までの学習内容に概ね沿った小問が圧倒的に多く，学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。また，詳細な事項を前提とするような問も少なく，ほとんどの小問は，高等学校までの学習で身に付けた基礎的な事項をもとに，地理的技能や見方・考え方を用いて考察するものであった。

２　試験問題の程度・設問数・形式等

⑴　「地理Ａ」への評価

今年度も，各小問に図や表，写真などを含めた豊富な資料が提示され，文章だけが提示された小問は31問中３問にとどまった。また，組合せ選択の小問が今年度も，31小問中18問を数え，昨年度に続き解答には多くの時間を要した。しかし，基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問が多く，また，細かな知識レベルを前提とした難問もなく，概ね適切なレベルに作問されており，そうした点への評価は高い。平均点は，昨年度よりも１小問程度の４点ほど易化した。難易度の調整については，少なくとも今年度と同程度となるよう是非お願いしたい。

第１問　「地理的技能とその活用，および日本の自然環境や自然災害」　昨年度に引き続き本年度もタイトルに「自然災害」が加えられた。半数の小問が自然災害に関するもので，自然災害を中心とする大問との印象が強くなった。「現代社会における地図と地理情報の活用」と題され，様々な地図資料が大問中に示された一昨年度に比べると，今年度も地図や地理情報に関する内容が前面から後退したが，センター試験での出題が多くみられたメルカトル図法の世界図を用いた地図投影法に関する問が，本年度は数年ぶりに出題された。

問１　提示されたメルカトル図法について述べた文の正誤選択の小問。基礎的な内容が扱われ易。

問２　等高線が示された地理院地図の読み取りの小問。カルスト地形ではないことは容易に読み取れるが，火山地形と判断することは容易ではない。難易度は標準的。

問３　日本全国の観測点における気候に関する４つの事象ついての数値の高位，中位，低位を示した図に関するもので，基礎的知識をもとに４つの図を判別する共通テストらしい小問。それぞれの違いが明確で判別しやすい。標準的な難易度。

問４　高潮についてのハザードマップを読み取った文の正誤判定の小問。単純な読み取り問題で易。

問５　陰影起伏図を重ねて示した地理院地図の，標準地図に示された避難場所や避難経路に関する小問。避難経路途中の崖崩れの危険性を図から読み取る内容が含まれるが，避難経路の点線と起伏を示す陰影が重なり読み取りにくい。難易度は標準的。

問６　自然現象における災害と恵みの両面について述べた文の正誤判定の易問。

第２問　「世界の生活・文化」　生活・文化を問う大問であるが，内容的には「地理Ｂ」での「資源と産業」に近い大問との印象。第３問の地誌的大問において生活・文化からの出題が多かったとはいえ，自然環境や歴史的背景などにより形成されてきた衣食住や言語宗教などの生活・文化に関するものが，もう少しこの大問で扱われることを期待したい。

問１　地域別に示された用途別年間水使用量のグラフに関する小問。東アジアでの稲作における水使用量が多いことが理解できていれば正解を導ける。標準の難易度。

問２　キャプションがついた農作物と家屋についての写真から熱帯地域であることを読み取った上で，月平均気温と月降水量について示されたグラフから熱帯にあたるものを選択する小問。工夫された問であるが，設問文中に正解となる熱帯以外の３地域における情報がまったく示されていない点には疑問が残る。難易度は標準的。

問３　写真とキャプションが示された二つの移動手段の設置目的について問う小問。二つの移動手段に共通する目的と，一方の交通手段にしかみられない目的を，それぞれの解答番号で問う新しい形式。「地理Ｂ」にも同様の形式の小問がみられた。新たな形式が増えた点や，解答欄のずれを誘発する点などを考えると，受験生には優しくない。内容的には，ボリビアのロープウェイの設置目的が，選択肢の中では道路渋滞緩和しか考えられないものの，出題にはよりメジャーな地域のメジャーな交通手段の方が適していたのではないかと思われる。難易度としては，どちらの解答番号も標準的。

問４　３都市における言語や文字の違いと，東京を加えた４都市間の旅客便による結びつきの強弱を組合せ作成された工夫された小問。第４問の中で最も生活・文化らしい良問としたい。難易度は標準的。

問５　サケ・マス類の輸出量と輸入量のそれぞれ上位10か国の輸出量・輸入量を鮮魚・冷蔵品と冷凍品の比率を含めて示したグラフに関する小問。工夫された問い方であるが，「地理Ａ」の生活・文化における小問というよりは，「地理Ｂ」の資源と産業における小問に相応しい。難易度としては標準的。

問６　３か国の製造業について示された出荷額と出荷額に占める業種の割合と，製造業の特徴を述べた文との組合せ選択の小問。難易度は標準的。この問も前問同様，「地理Ａ」の生活・文化における小問というよりは，「地理Ｂ」の資源と産業における小問に相応しい。

第３問　「北アメリカ」　統計資料に依拠した単調な組合せ選択問題の連続で，「地理Ｂ」的であったとの昨年度の指摘からは大きく改善され，「地理Ａ」に相応しい大問となった。問１を除けばどの小問も取り組みやすく，受験生への負担が小さい大問であり，こうした大問が増加することを期待したい。

問１　北アメリカ大陸の標高の違いを濃淡で表した図に示された３地点と，別に示された３地点の景観写真との組合せ選択の小問。キャプションがなくとも写真１のアは乾燥地域と読み取れ，図１の地点Ａと判断できる。しかし，図１の地点Ａと地点Ｃの植生はともに針葉樹林帯であり，写真ウがどちらの地点を示したものか判断できない上に，キャプションがないため写真１のアは何を読み取らせる意図の景観写真なのかはっきりしない。そのため，図１から地点Ａを平原地域と読み取り，写真１のウと判断させる意図と思われるが，図１の地点Ａも山岳地域に近い地点の位置しており，写真１のアの可能性も捨てきれない。完成度の低い悪問であり，難易度も高くなってしまっている。

問２　アメリカ合衆国の４つの農産物の州別生産量上位州の分布に関する小問。４つの地図の中から単純にブドウを選択させる形式で，知識を直接的に問うものとなっている。難易度は

標準的。解答に時間を要しないこうした知識を直接的に単純な形で問うものがもう少しあってもよいのではないか。

問３　アメリカ合衆国の地域別の人種民族構成に関する小問。これも基礎的な知識を直接的に問うもので，難易度は標準的。

問４　カナダでみられる民族的都市景観が写された写真について述べた文の正誤判定の小問。ハングル，キリスト教会，モスク，漢字のそれぞれが写真から読み取れ，提示された文も基礎的なもので，易問。「地理Ａ」らしい仕上がりの問い。

問５　デトロイトとサンノゼを題材にした都市住民の生活課題に関する小問。両都市の産業の特色と，アメリカ合衆国での社会保障費に関する動向を問うもので，難易度は標準的。

問６　カナダの多文化主義に関する小問。閣僚の出自構成の変化を人種民族別，性別，選出州別に示した図を用いての出題で，多文化主義を問う良問としたい。

第４問　「環境問題」　本年度もタイトルから「世界の結びつき」が除かれ，地球的課題の中でも「環境問題」に特化した探究場面を想定した大問となった。世界の結びつきで扱われてきた内容や，環境問題以外の地球的課題についても，それぞれに地理的視点を交えながら考察していく必要性は高いはずである。他の大問においても探究場面を想定した大問では，出題分野が偏ることが多いが，探究的な学習場面を想定した大問においても，幅広い分野から出題されることが望まれる。

問１　地球温暖化に対する国や地域による立場の違いに関する会話文中の正誤を問う小問。標準的な難易度。

問２　提示された日本を含めた４か国のプラスチックごみの国際的取引に関するもので，日本以外の３か国の組合せ選択の小問。資料に与えられた文で判別が可能で，標準的な難易度。

問３　国際河川における有害物質の流出とその移動に関する小問。資料を読み取っての文の正誤判定が求められた易問であるが，興味深い題材が用いられている。

問４　バイオ燃料の拡大による新たな課題の発生に関する小問。内容的には３か国のバイオ燃料の主な原料作物を判別する組合せ選択の小問で，易問。

問５　移動手段の違いによる二酸化炭素排出量の違いについての小問。計算が求められはしたが，これも易問。

問６　探究テーマと課題に対する取組みの例に関する小問で，問３から易問が続いた。

第５問　「利根川下流域の地域調査」　利根川下流域という，これまではあまり例がない視点による地域設定が行われた。地域調査に関する大問は，これまでも地形図，地理院地図より作成された図，写真などを含め，図表などの資料を多用した小問が並び，それらの資料を読み取りながら思考・判断していく構成であり，今年度も同様のものとなった。そうした中でも，問３～５は，それぞれ１小問に２ページや２ページ近くを費やすものであり，解答にも時間を要する小問であった。第１～第４問の大問における解答時間を確保するためにも，もう少し解答時間の短縮に配慮した作問が行われることを願いたい。地形図については，今年度においても昨年度同様，地域調査の大問で扱われたため「地理Ｂ」においても出題された。来年度以降も継続して「地理Ｂ」受験生にも，地形図の読図を用いた小問が作成されることを望みたい。なお，今年度も地域調査の大問では，大問中の設問のすべてが，調査対象となる地域を題材としたものであった。地域調査の大問の中でも，対象地域以外の地域についても扱い，対象地域を他地域と比較しながら地域の特色を考察していくような小問の作成を期待したい。

問１　利根川とその周辺について示された地図から３地点の中で利根川流域に位置する地点と，利根川流域の２都市間の標高差を問う小問。難易度は標準的であるが，２つの異なる事

象についての問いを１つの小問で解答させ組み合わせる形式の問いであり，受験生への負担を増している。

問２　地理院地図により作成された図を読み取って，土地利用割合を示したグラフから４つの地域のいずれであるかを判別する小問。問１とともに，「地理Ａ」第１問の大問の小問としても成立する。この問も難易度は標準的である。

問３　新旧地形図の読み取りに関するもので，地理Ｂにおいては，唯一の地形図を用いた小問。この問も，難易度は低いものの，佐原中心部の新旧地形図の読み取りと，利根川下流域における渡船か橋の分布の推移を示した図からの考察という，２つの異なる事象について１つの小問で問う形式のものとなっており，受験生の負担は大きい。

問４　利根川下流域の水害対策に関する小問。前問ほどではないが，これも設問文が長く解答に時間を要する。難易度は低い。

問５　二ホンウナギの漁獲・生産量に関する小問。取り上げられた内容に工夫がみられる。この問も易問であるが，解答には比較的時間を要する。

問６　地域調査における探究課題の調査方法に関する小問で，これは時間を要しない易問。

⑵　「地理Ｂ」への評価（「地理Ａ」との共通問題を除く）

大問構成と内容については，第３問が都市，人口である点なども含めて，昨年度と同様であった。今年度も，図や写真，グラフ，表などの資料が豊富で，組合せ選択の小問も昨年度とほぼ同数の19問を数え，解答に多くの時間を要した。しかし，センター試験から共通テストへの変化を意識して作り込み過ぎたと思われるような共通テスト初年度の自然環境を扱った第１問のような大問はみられなかった。全体を通して解答そのものに迷う難問はみられず，平均点の上昇につながったと思われる。しかし，成績上位層が高得点を取りにくい状況に変化はなく，来年度以降の改善を是非お願いしたい。

第１問　「自然環境や自然災害」　世界的スケールを意識した小問は複数みられたものの，昨年度本試験と同様，世界図は用いられなかった。地形や気候に関する分野においても，世界図をもとに世界を大観させ考察させるような小問の作成が望まれる。また，地域の地形や気候が扱われた小問においても，地域を特色づける地形や気候の成因や，地形や気候と人間生活との関わりに関する内容は，地誌的な大問や地域調査の大問を含めてもほとんどみられなかった。地理において地形や気候を学習する意味を考えれば，こうした内容に関する作問が，「地理Ｂ」においても積極的になされることが期待される。なお，難易度が高かったと考えられる昨年度本試験とは異なり，今年度の第１問は標準的な難易度の小問が多く，大問全体の難易度も標準的なものだった点については評価したい。

問１　四つの自然現象の時間スケールと空間スケールに関する小問。自然現象が異なれば認識すべき時間スケールと空間スケールも異なることを問うており良問としたい。しかし，これまでにみられなかった問い方であり，受験生に対するハードルはやや高かったと考えられる。

問２　サンゴ礁の分布と寒流の影響について問う小問。内容的には定番のものであるが，問い方が新しい。難易度は標準的。

問３　月別時間別の気温分布を等値線で示したグラフと３地点の組合せ選択の小問。選択された各地点は定番で，難易度も標準的。

問４　二つの地理的事象が共通してみられる地点と一つのものしかみられない地点を，それぞれの解答番号で解答する新しい形式の小問。「地理Ａ」にも同様の小問がみられた。新たな形式が増えた点や，解答欄のずれを誘発する点などを考えると，受験生に優しくないものと考えられる。内容的には火山と熱帯低気圧の分布を問うもので，易問。

問５　日本とその周辺の三つの範囲と，震源分布について東西方向の位置と深度で示された図との組合せ選択の小問。海溝の分布を基礎的知識とし，併せて直下型地震の分布に関する知識も問うており，ＰとＱの判別はやや難しい。

問６　地表面の田畑から建物や道路への変化による降雨後の河川流量の変化に関する小問。内容についても，難易度についても標準的なもの。

第２問　「資源と産業」　昨年度本試験は，持続可能な資源利用と題し，エネルギー資源の利用と環境への影響に特化した大問であったが，本年度は第一次産業が過半であったものの，他の産業分野からも出題された。受験者のこれまでの学習に応える意味では，さらに広く産業の各分野からの幅広い出題を望みたい。難問はなく，難易度としては適当な大問と考えられる。

問１　中世ヨーロッパの三圃式農業に関する模式図を読み取った文についての正誤判定の小問で，基礎的な知識を問う易問。

問２　４つの地域における，灌漑面積割合と土地生産性の高低を問う小問。各地域の特色が明瞭で，難易度は標準的。

問３　遺伝子組み換え作物に関する世界図を読み取った文の正誤判定の小問。この問も難易度は標準的。

問４　牛肉，鶏肉，羊肉のそれぞれにおいて世界に占める生産量が１％以上の国・地域における生産量に占める輸出割合の高位，中位，低位を示した３つの世界図と，それぞれの肉との組合せ選択の小問。図化されているものが生産量に占める輸出割合となっている点が，問の難易度を上げている。単純に，牛肉，鶏肉，羊肉のそれぞれにおいて世界に占める生産量が１％以上の国・地域示した世界図と，それぞれの肉との組合せ選択とすることで難易度を下げ，地理Ｂ全体の平均点を高めることはできなかったのだろうか。

問５　フランスとポルトガルの各交通機関別の輸出額と輸出量における割合を示した円グラフに関する小問。近年では定番となった形式の問い方であるが，難易度はポルトガルが問われたことで比較的高かった。

問６　４か国の紙生産におけるパルプと古紙の消費量を示したグラフについての小問。SDGsを意識した問で，難易度は標準的。

第３問　「日本の人口や都市」　探究的な学習の場面が想定された大問。一昨年度，昨年度同様，「生活・文化」の小問はみられなかった。大問タイトルが「日本の人口や都市」とあるように，海外の人口や都市に関する内容が少なかったが，産業分野と同じく幅広く様々な地域や内容から出題されることを望みたい。難易度が比較的高いと思われる小問が２問含まれ，大問全体として，やや難易度が高かったと感じる。

問１　九州地方と四国地方から三大都市圏への人口移動の変化に関する小問。移動先の東京圏と大阪圏との判別は容易であるが，移動元の九州地方と四国地方の判別は難易度が高い。四国地方の方が九州地方よりも大阪圏との結びつきが強いことを判別の根拠とする作問には疑問が残る。

問２　東京に関する三つの指標とグラフに示された指標の推移との組合せ選択の小問。バブル経済期の地価高騰が理解できていれば正解でき，難易度は標準的。

問３　ある地方都市についての現在が示された地理院地図から作成された地図に表された３地点と，３地点の変容の様子を述べた会話文との組合せ選択の小問。地方都市の変容に関して共通テストらしく問うもので，仕上がり具合は良い。難易度としても標準的で，こうした問の出題の増加が望まれる。

問４　過疎に関する三つの指標を県別に示した階級区分図に関して述べた会話文の下線部の

正誤を問う小問。図を読み取りながら会話文の下線部の内容について考察するため解答に時間は要するが，難易度は低い。

問５　４か国における従属人口指数の推移に関する小問。設問文の注に示された従属人口指数に対する理解と，各国の年齢段階別構成の推移に関する理解が必要で，難易度は高い。いずれかの国をグラフ上で明らかにすることで，考察のヒントとし難易度を下げる工夫があっても良かったのではないかと感じる。

問６　３か国における外国人労働者の流入人口の推移に関する小問。問われている内容も，難易度も標準的なもの。

第４問　「インドと中国」　インドと中国という連続した地域を取り上げ，一部は両国について比較地誌的に扱った大問。共通テストへの移行から地誌に関する大問が２大問から１大問へと減少した中で，様々な問い方がみられるたが，また新しい形式の大問が作成された。こうした形式が用いられたこともあり，インドや中国の各地域に関して詳細に問う小問はなく，問６を除いては，いずれの小問もインドと中国について大観できていれば正解を導けるものであり，評価は高い。なお，問を工夫することで難易度が上がったり，解答に要する時間が増加したりする小問が多い中で，工夫された中でも難易度は高くない問３のような小問がみられたことも評価したい。

問１　インドと中国の４地点と，各地点における土地利用別の面積割合を示した表との組合せ選択の小問。４地点の中では降水量が多く気温も比較的高いＣでの森林率が高いと判断し正解を導く問と考えられるが，与えられた高度段階別地図が解答の助けとはあまりなっておらず，難易度は高い。Ｂを除く３地点の判別は非常に難しい。

問２　インドと中国の米と小麦の生産地の分布を問う小問。内容としては定番のものだが，問い方は新しい。難易度は標準的ではあるが，解答にやや時間を要する問であり，受験生への負担を重くしている。

問３　インドと中国の１人当たり総生産と出生率について比較地誌的に問う小問。作問への工夫がみられ，難易度が低い点も含めて評価できる。

問４　インドと中国の産業の発展を比較して問う小問。両国のこれまでの産業の発展とその特徴が理解できていれば正解でき，標準の難易度。

問５　インドと中国の両国にオーストラリアを加え，物と人の３か国間の移動の変化について問う小問。オーストラリアから中国への資源の移動が理解できていれば正解でき，難易度は標準的。

問６　インドと中国の環境問題に関する小問。Ｓの方が全体に南東側に高濃度地域が偏っていることが判別の根拠と思われるが，ＳとＴの２つの図から１月と７月の判別の根拠を得ることは難しく，難易度は高い。

第５問　「利根川下流域の地域調査」　第５問の評価は「地理Ａ」での記述の通り。

４　総評・まとめ・要望

今年度は，「世界史Ｂ」，「日本史Ｂ」との平均点にほとんど開きがなかった。この点については大いに評価すべきである。しかし，「地理Ｂ」では高得点を望めないとの例年の声は，今年度も多く聞かれたと思われる。「地理Ｂ」を学習した生徒が，しっかり学習をすれば満点に近い得点がとれるような問題作りを切に願うものである。

大問数は，「地理Ａ」も「地理Ｂ」も５大問で昨年度からの変更はなかった。また解答数は，「地理Ａ」，「地理Ｂ」ともに，１つの小問を２つに分割したものを含め31となり，６小問ずつの５大問

という構成に変化はなかった。豊富な資料と組合せ選択の小問の多さなどにより，解答時間はぎりぎりで見直す余裕はなかったと思われる。小問数のさらなる削減を切望したいが，少なくとも今年度の小問数が維持されることを望みたい。なお，「地理Ｂ」の地誌の大問において，インドと中国という連続した地域が扱われ，一部の小問は比較地誌的に扱われるなど，新たな形式の出題となった。

各小問においては，これまで同様さまざまな資料が豊富に示され，中には複数の資料を照らし合わせる必要がある小問も見られた。そうした中で，文章のみからなる小問は，「地理Ａ」では３小問，「地理Ｂ」においてはまったく見られず，解答に時間を要した。

ささまざまな資料の中でも世界図を用いた小問は非常に少なく，「地理Ａ」ではメルカトル図法の小問，サケ・マス類の貿易に関する小問，地球温暖化に関する小問の３小問に過ぎなかった。また「地理Ｂ」においては，遺伝子組み換え作物に関する小問と，食肉に関する小問の２小問のみであった。現代世界の諸事象を世界的な視点で理解したり，世界を大観する中で地域の特色を考察したりするという視点は重要であり，世界図を提示した上での問題作成の増加が望まれる。

また，資料として写真が用いられた小問は，「地理Ａ」においては７小問みられたが，「地理Ｂ」では「地理Ａ」と共通の第５問で２小問が見られたのみであった。「地理Ｂ」における出題においても，写真が有効な役割を果たすことは多く，来年度は「地理Ｂ」単独の大問においても，資料として写真が用いられた小問の作成を期待したい。

なお，解答に時間を要する原因の一つである「組合せ選択」の形式は，今年度も「地理Ａ」で18小問，「地理Ｂ」で19小問出題されたが，今年度は，８択と９択は，「地理Ａ」，「地理Ｂ」ともに見られなかった。また「組合せ選択」の中でも，当てはまる図とともに文中の空欄に適語を入れるなど，複数の事項についてそれぞれ判断し選択する２×２の４択となっているものは，「地理Ａ」で９小問，「地理Ｂ」で８小問見られた。安易に「組合せ選択」の小問を多用することがないよう強く要望したい。

最後に，今年度も雨温図とハイサーグラフは，「地理Ａ」，「地理Ｂ」ともに示されなかった。月平均気温や月降水量についてはさまざまな示し方があるが，地理的技能の育成という観点からは，雨温図やハイサーグラフを直接示して，各都市の気候を概観させたり，見るべきポイントを受験者に直接読み取らせたりした上で考察させる小問が作成されてもよいのではないだろうか。